
カードにキス

ミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードにキス

【Nコード】

N3160S

【作者名】

みー

【あらすじ】

何を考えているのかさっぱり分からない彼を好きになったあたし。ある日の帰り道、この微妙な距離は埋まるのか？

あたしと彼は同じ大学で、帰る方向が同じだから、たまに一緒に帰ることがあった。

空いている車内。隣同士に座り、他愛無い話をする。

彼が先に降り、そのひとつ先であたしが降りる。

あたしは彼が好きだけど、なかなか埋まりそうにもないこの微妙な距離に困っている。彼はどうにも読めない人で、あたしのことをどう思っているか到底分からないから。

そんな彼に、あたしはとてもじゃないけど好きと伝える勇氣はない。

その日は大学のみんなで夕飯を食べに行って、いつもより帰りが遅くなった。

隣同士に座るあたしたちも、はしゃいだせいで少し疲れ、彼も心なしに眠たげだった。

電車の窓からはくっきりと白い満月が見えて、

当たり前のように彼の隣にいられることをとても幸せだと思った。

時の流れは早く、あっという間に彼が降りる駅に着いてしまった。しかし彼は一向に降りる気配がない。

眠っているのかと思えば、起きていた。

「早く降らないと、しまっっちゃうよ！」

あたしは慌てて必死に彼の肩を叩いたけど、時既に遅し。ドアは閉まってしまった。

思わず溜息がでる。

「どうしたの？ぼーっとしてた？起きてるのに乗り過ごすなんて…」
彼は肩をすくめて答える。

「いいよ、次で降りるから。」

次の駅、あたしがいつも使っている駅で、2人一緒に降りた。

この駅に彼がいることが、何だか新鮮だ。

「送ろうと思って。遅くなったから。」

彼が突然そんなことを言い出したので、思わぬ展開にとっても焦った。
「いいよ！あたしの家ここからすぐの所だし、上りの電車で帰りなよ！」

本気で遠慮した。送ってもらうのが申し訳ないくらい、家は駅に近いのだ。

だけど彼はしれっとしている。

「もう決めたし。行くよ。」

先に改札を出てしまった。

いつもは1人で歩く道を、彼の隣で歩くのは不思議な気分だった。

電灯に照らされたアスファルトにのびた2つの影。

風の匂いさえ今日は違うように思える。

「この駅久々に降りたなー。」

彼はあたしの緊張をよそに、飄々としている。

背の高い彼を横目で眺める。

いつもは少し心細い気持ちで歩くこの道も、
彼の隣だとこんなにも安心で、幸福である。

小さな公園が見えた。あの角を曲がればもうあたしの家で、この短すぎる幸福な時間に終わりが告げられた気がした。

「もう着くから、この辺でいいよ。」

彼に向き合って小さく手をふる。

「送ってくれてありがとう」

すると、彼はおもむろにバッグから小さな箱を取り出した。

「はい、これあげる。」

「え？」

「誕生日プレゼント。」

そう、今日はあたしの誕生日。

大学の友達がみんなで開いてくれた誕生日会で、いつもより帰るのが遅くなった。

「けど、もう、みんなから合同のプレゼントもらったけど…」

みんなはお金を出しあって、あたしが欲しがってたカバンを買ってくれた。

「あれはみんなで買ったやつ。正直金を出したけど選んだ他の人だし、あれだとあんまりあげた実感なくて。」

はい、と言ってあたしの手のひらにその小さな箱をのせてくれた。

「これは俺個人からのプレゼント。誕生日おめでと。」

「ありがとう…」

言葉では言い表せない程の嬉しさに、思わず顔がほころぶ。

満足気な彼のあどけない笑顔に、きゅっと胸がしめつけられた。

「じゃあ俺帰るね。気をつけて。」

プレゼントを渡した彼はそう言って、早々と帰ってしまった。

あっさりしている所が、彼らしいというか何というか…

彼の姿が見えなくなるまで見送ったあと、家に帰るまで待ち切れなくて、その場ですぐ箱を開けた。

中身は淡いピンクの花のネックレスと、
Happy Birthdayとだけ書かれた手書きのメッセージ
カード。

結局何の進展もなく、あたしはこのプレゼントの意味すら分からず
じまい。

もしかしたら、深い意味などないのかもしれない。
彼の気持ちも分からないまま。

だけど、とりあえず最高の誕生日だったから、今日は深く考えない
でおく。

あたしは電灯の下で、彼のくれたメッセージカードにキスをした。

（後書き）

このふたりの続編を連載しようか検討中です、感想いただけたら嬉しいですよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3160s/>

カードにキス

2011年10月8日23時27分発行